◆書評◆

ケイト・マン著／小川芳範訳

『ひれふせ、女たち
ミソジニーの論理』

（慶應義塾大学出版会　2019年　ISBN 9784766426359　3200円＋税）

林　美子
（お茶の水女子大学大学院　博士後期課程）

2020年2月、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会の森喜朗会長（当時）が「女性が多い会議は時間がかかる」と発言し、女性蔑視だと非難を浴びた。森は辞任し、会長職を自らと同世代の男性に引き継ごうとして再び批判を受け、最終的に橋本聖子五輪担当相（当時）が後任に就いた。橋本は過去に男性元アスリートへのセクシュアルハラスメントが報じられ、政治家として森を「父」と呼ぶことでも知られる。これで問題が解決したと言えるのか、疑問が残る落着である。

この顛末は、マンが本書で強調している主題にそのまま当てはまるだろう。ミソジニーは、それを行う個人の偏見に焦点をあてると本質を見失う。ミソジニーは構造的・社会的な現象であり、家父長制的規範がその背景にある。マンが言及するように、ミソジニー男という「腐ったリンゴ」を取り除けば済む話ではない。リンゴの比喩をさらに使わせてもらうと、リンゴの腐敗にはリンゴ箱が置かれた場所の湿度や温度などの環境と、箱の構造が関係する。だから、問題を解決するには箱の置き場所を変えるか箱の構造そのものを改める、つまり、社会の構造そのものを揺り動かしていく必要がある。

言い方を変えると、森発言は、古今東西の女性たちがさらされてきた天文学的な数の排除、侮辱、冷笑、暴力、殺人等に新たな一例を加えたにすぎない。繰り返されるパターンに共通する問題の本質を、マンは専門領域である道徳哲学のアプローチから解明を試みる。

マンによると、ミソジニーは非対称な道徳的援助の関係を使って、男性が女性を利用することにかかわっている。非対称な道徳的援助とは、女性が、特権的な立場を占める男性のために養育、慰安、無償労働といった援助をこなす存在だということである。ミソジニーの機能の大部分は、これらの役割が果たされるように監視し、女性から道徳的な財や資源を引き

DOI：10.24567/0002000121

出すことにある。それ以外の機能は、このような役割を果たさない女性著名人のような存在に対して向けられる攻撃である。彼女たちはケアする存在としての女性ではなく、権力欲が強く、思いやりがなく、支配的だとみなされる。彼女たちは誤った道徳規準に照らして道徳的に誤っていると評価され、ミソジニーの標的となり、それらの攻撃は女性に割り振られたケア役割を強化する機能を果たす。

まず必要なのはミソジニーの定義である。マンは一般的な定義を「素朴理解」と呼ぶ。「素朴理解」ではミソジニーを、ある個人が女性に対し、女性というだけの理由で嫌悪、敵意などの感情を抱く傾向を指すとし、個人の心理のレベルで説明しようとする。しかし、個人の内面は外部からは事実上ほとんど認識できない。その結果、ミソジニーの被害者からみてミソジニーは認識不可能となり、被害者の口封じにもつながりかねないとマンは指摘する。

この「素朴理解」に対してマンは「改良的フェミニズム理解」を提案する。ミソジニーは、第一義的にシステムまたは環境全体の属性である。女性に向けられる敵意は社会的・構造的な理由を持ち、政治的な現象であり、家父長制的性質の規範や期待なしには存在しない。それは個人的な偏見ではなく、旧来の社会規範体系が解体される過程で一部の人が覚える不快と敵意によってもたらされる。ジェンダー化された社会規範により自分が得ているはずの権利を奪われるという感覚が、それらの社会規範を崩そうとしていると見なされる存在への攻撃となって現れるのだ。

このように考えると、たとえば女性やノンバイナリージェンダーの人でもミソジニストでありうることが理解しやすい。マンは、自分自身を含め、だれもが無自覚のうちにジェンダー化された規範や期待の執行や監視に加担している可能性があると述べる。リンゴ箱の比喩をもう一度使わせてもらうと、女性と男性とが別々のリンゴ箱に入っているのではなく、家父長制的な道徳規範が支配する社会という同じ箱の中の存在である以上、女性がその影響を受けることが十分ありうるということだ。だから、女性が権力を持つことは、それが家父長制の維持に貢献する限りにおいて許容される傾向がある。他方で、本書にたびたび登場するオーストラリアのジュリア・ギラード元首相やヒラリー・クリントン米元国務長官のように、家父長制に対する脅威と見なされる女性たちは壮絶なミソジニーの標的となる。

ミソジニーを行う者たちは、ジェンダー化された社会階層において優位を占めている。下位集団の者が何らかの主張を行おうとすると、下位集団にあること自体をもってその信用性が否定され、上位集団の者に共感が集まる。マンはこの現象を、「彼(he)」と「共感(sympathy)」を合わせて「ヒ

ムパシー（himpathy）」と名付けた。男性優位社会では「良いやつ（good guy）」は悪さをしないとの前提が共有され、性暴力の被害者ではなく加害者が同情される。加害者と被害者の位置関係が逆転し、被害者は不可視化される。それが集団間の上位―下位の構造に基づくことから、ミソジニーはしばしば人種差別と交差する。マンによると、多数の黒人女性が男性警官から性暴力を受けた事件で、白人フェミニストはほぼ沈黙したのである。

ではどうしたらいいのだろうか。本書は明確な答えを提示していない。ただ、ミソジニーを行う者にも耳を傾けることを主張する知識人の融和的な態度を批判して、マンは、いささかためらいつつも、言うべき言葉は「連中なんてクソ食らえ（ファック・ゼム）」ではないかと記す。耳を傾けるべきは否定され、沈黙させられた被害者の声であろう。下位集団に属する者からの異議申し立てをきっかけとする連帯と、そこから生じうる集団間の序列の転覆の可能性が、豊富なエピソードの読み解きの中に通奏低音のように響いている。

本書は、ミソジニーにまつわる数々の疑問、もやもやに脱出口を提供する。「なぜ加害者が被害者のようにふるまい、人々もそのように認識するのか」「なぜ被害者の主張は疑われるのか」「なぜ女性がミソジニーに加担するのか」……。家父長制的秩序を背景とした非対称な道徳的援助という概念を用いることで、ミソジニーという現象の切断面が鮮やかに浮かび上がってくる。

とはいえやや物足りなく感じるのは、本書が様々な先行研究を縦横に引用しているにもかかわらず、イヴ・K・セジウィックが指摘した男性間のホモソーシャル連続体とホモフォビア、ミソジニーの三位一体構造への言及がないことである。セジウィックによると、男女間に権力の不平等がある社会の中心にはホモソーシャル連続体があり、女性と「男らしくない男」は排除され、女性は男同士による交換の対象となり、性的少数者の弾圧によってホモソーシャルな絆は強固となる。マンがセジウィックに触れなかったのは、セジウィックの議論がどちらかというとミソジニーよりもホモソーシャル連続体とホモフォビアとの関係に重点を置いているからだという推測も可能だろう。ただ、セジウィックの議論を踏まえることで、ミソジニーに関してより立体的、動的な理解が可能になると筆者は考える。そういった作業は読者に残されているということなのかもしれない。

参考文献

イヴ・K・セジウィック , 上原早苗・亀澤美由紀訳 , 2001,『男同士の絆　イギリス文学とホモソーシャルな欲望』名古屋大学出版会 .